

## 七月心光寺定例聞法会のご案内

- ＊期 日 平成十四年七月十六日(火曜日)
- ＊時 間 十六日(昼席)午後一時三十分より (夜席)午後七時より
- ＊会 場 (昼席)心光寺本堂 (夜席)心光寺庫裏
- ＊講 師 大石 法夫 先生(広島市在住)

## 心光寺からの便り

梅雨明けも間近となり、次第に暑さも本格的になってきました。皆様つつがなくお過ごしのことと存じます。



環境の下で、全国各地からお集まり下さった御同行の皆様方と三日間生活を共

に雄大な眺望を望む素晴らしい

1.2.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100.

すば

にしながら、大石先生のお話をじっくりとお聞きできましたことは、私にとりましてこの上ない喜びでありました。正しくこの世に浄土の顕現を見るような思いでしたし、私もその浄土の一員に資格無くして加えられているという喜びを静かに感じていました。

特に三日目の最後の法話では、話がいよいよ終りに近づく頃、大石先生の胸中にご師匠の藤解先生とうげに対する知恩報徳ちおんほうとく（ご恩を感じて、そのご恩に報いようと尽くすこと）の念が次第に高まり行き、終に感極まって、涙を抑えつつ話される師のお姿を目の当りまざまざと拝見させていただきました。師のこのような尊いお姿を間近に拝見できましたことは、私にとりまして終生忘れ得ぬ経験になるに違いありません。

以下、今回はその時の様子をもう少し詳しく書いてみようと思います。

大石先生がお話のどの部分で前述のような場面に立ち至られたかといえますと、それは「他力たうりき」についてお話をされている時でした。

大石先生は、「私はありふれた一人の凡夫に過ぎない。」と言われました。その凡夫である先生が、長い年月にわたる師（藤解先生）のお育てを通して、かたじけなくも弥陀の本願に遇うことができた。そしてその本願に乗せられて、今日ここに来た。また各地への法座の旅<sup>1</sup>も続いていると言われました。そして先生の乗せられているこのような本願の力を、他力たうりきというのだと言われました。

更にそのように本願に乗せられていく生活の様子を、中国の曇鸞大師どんらんたいしが書かれた『浄土論註』じやうとろんちゆに出てくる阿修羅の琴の譬えたとを引きながら説明されました。阿修羅あしゆらとは仏教の守護神の一人で、闘争を好む鬼神ですが、どういうわけかこの阿修羅の所持している琴が実に不思議な琴で、弾く者が誰もいないのにその琴からは見事な音色ねいろがひとりでに奏かなでられて、人々の心を静かに打つといわれています。曇鸞大師どんらんたいしは他力たうりきのはたらきを、この阿修羅の不思議な琴に譬えたとられています。

<sup>1</sup> 先生は八十一歳のご高齢でありながら、一ヶ月の内に、定期的なものだけでも、自宅での定例法座三回、各地への出講法座九回と、壮年の人でも一ヶ月続けるのも困難な過密日程を、正月も盆も関係なしに、水が流れるようにこなしておられます。また定例法座の合間にも、今回のような不定期の法座にしばしば出かけられるのです。

たのです。

つまり他力たりにきとは、一人のありふれた凡夫が弥陀の本願きみやうに帰命すると、本願がその人の命となって働き始めて、自分も救われる偉大な活動をおの自ずから始めるようになる。その活動は常識の枠わくを超えたものであるけれども、



本願力ほんがんりきにはからわれて行う活動であるから、そこに自分というものはない。偉大な働きをしながらも、自分の力てがらでしたとか、自分の手柄てがらであるとか、そういうものが混まじらない。ただ本願力ほんがんりきの自ずおのからなる働きである。だからそれは、ちょうど弾ひく人がいないのに人々の心を打つメロデーかなが自然あしゅらに奏かなでられるという阿修羅あしゅらの不思議な琴と同じである。このように曇鸞どんらん大師だいしは、深い感銘を以って他力の働きを阿修羅あしゅらの琴たどに譬たとえられたのです。その阿修羅あしゅらの琴たどの譬たとえを大石先生は取り上げられ

ました。

そしてその話の後、八十九才の高齢を押しして北海道から参加された辻山三郎さんのことに触れられました。北海道では辻山さんが中心になって、毎年五月に

大石先生をお呼びして二泊三日の研修会を開いています。それで辻山さんが大石先生に、来年もお願いしますと依頼されたことに触れて、次のようにおっしゃいました。

「辻山さんは帰りの飛行機の関係で、もう少ししたらここを出発して札幌に帰られます。きのう辻山さんから、来年五月も札幌の研修会、お願いしますといわれました。しかしお互いに、いっどうなるやらわかりません。私もそうです。喜んで参りますと言いましたが、実現するかどうかはわかりません。いつも今日が最後です。」

ここに、各地の法座に出かけられ、みんなに会われるに際しての先生の覚悟が語られています。先生はいつも今日が最後。みんなに会うのも今日が最後。明日は自分は居ないかも知れない。また皆さんも居ないかも知れない。いつもそういう覚悟で、先生は各地の法座に臨まれているのです。その常のお気持ちだが、三日間いっしょに過ごして来られて、いよいよこの法話でお別れという時に、思わず言葉となつて出てきたのです。

続いて先生は、親鸞聖人がご臨終の前日に歌われたと伝えられる<sup>2</sup>『御臨末の御書』を取り上げられて、次のように話を展開されました。

「念仏行者は死なぬ命を賜るんです。今日、今日を、永遠の命を賜って生きるんです。だから死んでおしまいではないんです。親鸞様もそうでしょう。亡くなる前の『御臨末の御書』というのが残っていますよ。念仏行者はあんなるんですよ。」

この世のことは皆一人ぼっちよ、本当は。でも本願を信じられたらね、ど

<sup>2</sup> 「わが歳きわまりて安養浄土へ還帰すといえども、和歌の浦の片雄浪の寄せかけ寄せかけ帰らんに同じ。一人居て喜はば二人と思うべし。二人居て喜はば三人と思うべし。その一人は親鸞なり。」

我無くも 法は尽きまじ 和歌の浦 青草人の あらんかぎりは

「

んな人もね、摂取不捨<sup>せつしゆふしや</sup> となる。死の瞬間まで。如来様の永遠のいのちが私の中で歩みを始める。だからどんな人がおっても、どんな場所、どんな会座<sup>えざ</sup>へ行っても、全然仏縁がない人の所に行ってもね、自由に法を説く。これが曇鸞<sup>どんらん</sup>大師<sup>だいし</sup>が書かれた『浄土論註』に出ていますよ。浄土に生まれた菩薩<sup>ぼさつ</sup>には四つの功德があると。どんな場所に居<sup>お</sup>っても、その場所に居るままに十方の諸仏を供養<sup>くよう</sup>し、十方の衆生を教化<sup>きやうけ</sup>すると。また浄土に行ったとか、浄土から帰ったとか、人を救うたとか、恩に着せるとか、そういう思いがない。どんな会座<sup>えざ</sup>に行ってもね、その会座<sup>えざ</sup>に融<sup>と</sup>けこんで法を説く。全然仏縁がない人の所に行っても、決して捨てずに、念仏のまんまで法を説く。そういう活動をするようになる。

親鸞様は実際にそういう世界をいただかれ、実際にそういう世界を歩まれたんです。」

大石先生はそうおっしゃって、『報恩講の歌』にそのような親鸞聖人のお心が歌われていると言われました。『報恩講の歌』というのは、先の『御臨末の御書』<sup>ごりんまつごしよ</sup>を元にして浄土真宗本願寺派（お西）が作成したものです。大石先生はこの『報恩講の歌』の二番と三番を歌い始められました。

二、一人居<sup>い</sup>ても喜びなば 二人と思え 二人にして 喜ぶ折<sup>お</sup>りは  
三人なるぞ 一人こそ 親鸞なれ

三、名残<sup>なごり</sup>の御言<sup>みこと</sup> さやかにして み名よぶ声を 慕<sup>した</sup>い来<sup>き</sup>まし  
法の集<sup>つど</sup>いの み座<sup>ざ</sup>毎<sup>ごと</sup>には み影を映し 臨<sup>のぞ</sup>みたもう

ここまで歌われた後、次のように話を続けられました。

<sup>3</sup> 私に念仏を勧めて下さる師や友の念仏の声が思い起こされて、私もその人たちに習って念仏申そうという心が起こった将<sup>まさ</sup>にその時に、弥陀の本願が私の全てを、一切<sup>いっさい</sup>財捨<sup>ざいし</sup>てることなく深く受け止めて下さること。またそのことが確信をもって感じられること。

「親鸞様の説かれた本願がなかったら、今日のこの会座えざはないんですよ。私はその本願に乗せられて、そしてその世界をいただいて、この場に遇わしていただくんです。」

「ここまで話してこられて、先生の声がかすかに震ふるえていることに気付きました。こみあげてくる思いを懸命けんめいに抑えつつお話しされている様子が伝わってきました。師のその時のご心中を、憚はばかりながら私なりに勝手に推測させていただきますと、

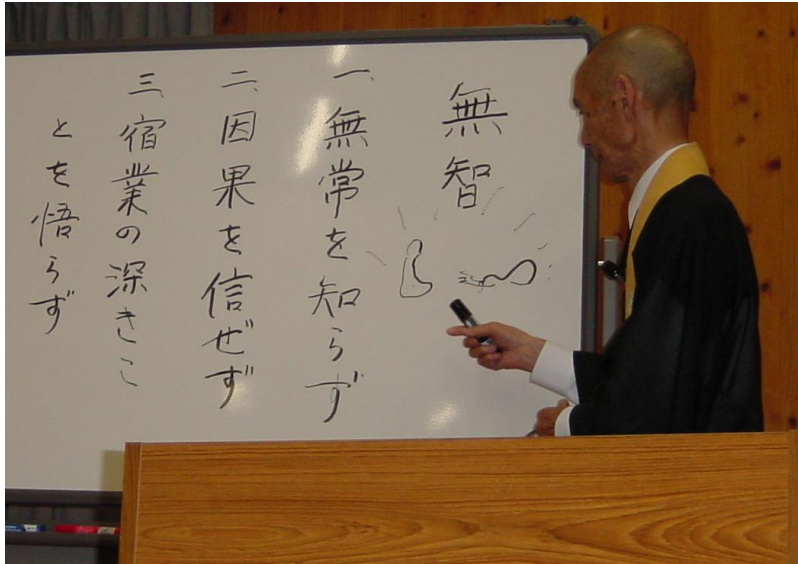
《全国から集まってこられた御同行ごどうぎょうの皆様方と今この会座えざに遇わせてもっている。そして本願の教えを共に聞かせてもっている。それは親鸞聖人がご苦労なさって本願の教えをお説き下さったお陰である。またご師匠しじょうの藤解先生げんかいが長い間ご苦労されて私を育てて下さったお陰である。先師方のこのようなご苦労のお陰で、私は今この尊い本願の教えに遇わせてもらうことができた。またその本願に乗せられて、今皆さん方と共にこの会座えざにこうして遇わせてもっているのである。》

このようなお気持ちではなかったかと思えます。「他力たうりき」についてお話を進められる内に、先師に対するこのような深い謝念しゃねんが、一時に師の胸の中にこみ上げてきたのだと思います。

そして再び阿修羅の琴の譬えを取り上げて、次のようにお話を続けられました。

「往生人おうじょうにんは人を供養くようしたとか、救ったとか、そういう思いはない。それは阿修羅の琴の、鼓こするもの無くして音曲いんきょく自然じねんなるようなものです。

私は音痴おんちです、全く。音痴でありながら、毎日メロディーを奏かなでさせていただく。音痴でありながら、何か楽しいんですよ。毎日。」



先生が三日間の研修会で語ってこられたことは、ご自身の自説を披露ひろうされたのではない。本願に乗せられ、本願にはからわれて、皆さんといっしょに聞かせてもらっただけである。それは阿修羅の琴が、弾ひく人もいないのに自在かなにメロディーを奏かなでると同じであると。そういうことを阿修羅の琴の譬たとえで伝えようとされたのだと思います。

それから「音痴」ということで、先生は、自分は一人の凡夫にすぎないということとを譬たとえておられるのです。

その後、

「この研修会も三日間が過ぎて、お別れのときが近づきました。」

と言われて『報恩講の歌』の四番を歌い始められました。

四、もしそれ知識ちしきの 教しえなくば 永久とわの闇路やみじに 迷いぬらん  
御心みこころこめし 君きみによりて 今し仏ほとけの 慈悲じいに遇あいぬ

ここまで歌われたところで、終に先生の声は本当に詰まってしまいました。心中をお察し申し上げれば、二十六歳のときに何もかも捨てて藤解先生とうげの門下に帰して以来、六十四歳にしてようやく光に出遭うまでの長くて苦しかった求道の歷程の数々が、一度に凝縮ぎようしゆくして先生の胸むねの中に去来きらいしたのではないかと思えます。それと同時に、もし藤解先生とうげの、「そこまですなくても」と思いたくなくなるような厳しいお育てがなかったならば、今日の私はなかった。今日こうして

皆さんといっしょに本願の教えを喜びながら聞かせてもらうことができるのは、ひとえに藤解とうげ先生が私のために身を捨てられて、長い間ご苦勞されてお育て下さったお陰である。その師のご恩は謝しても謝し切れるものではない。このよ  
うな思いが一時に先生の胸の中に突き上げてきたのではないかと思えます。その  
ことが私にもひしひしと伝わってきました。

ここで私は、大石先生が四年前に作られた「光あり」という歌の中の次の一  
節を思い出します。

歩み続けた この道一つ 心の闇路やみじを 幾十年いくとせ  
師仏しぶつの教え なかりせば 何で往ゆけよう 光明土こうみょうど

この歌の一節に、それまで歩んでこられた先生の様々な思いの全てが凝縮ぎようしゆくし  
てこめられていることを、今しみじみと感じます。

その後大石先生は、

「そして恩徳おんとく讃ほめですよ。」

こう先生は言われて、『報恩講ほうおんこうの歌』の五番を歌おうとされました。ところがな  
かなか声が出ません。ややあつて先生は、

「歌詞を忘れてしまいました。終わりました。」

そう言われて、法話を終えてしまわれました。恐らく、歌い始めると收拾しゆじのつ  
かぬことになりそうなことを感じられて、歌うのを中止されたのだと思います。  
その五番というのは次のような歌詞です。

五、喜び高く 胸にあふれ うれしさ深く 肝きもに銘めいず  
身は粉に 骨は砕くだきてしも 報むくい難がたなき 君が御徳みとく



私は一番前の席に座って、このような師のお姿を目の前にまざまざと拝見させていただきました。普段の定例法座では見ることでできない師のお心の奥底を垣間見させていただいたという気持ちです。大石先生の驚異的な活動の根底にあるものが何であるのか、何が大石先生をしてかく動かしめているのか、その一端にほんの少しだけ触れさせていただいたという思いがしています。この世のものとは思えない何か尊いものを見させていたでいています。そんな感動を静かに感じていました。そして大石先生が出会われた本願に、今私もかたじけなくも出会わせていただいているのだと思いました。

研修会の全日程が終わった後、帰る前に家内と家内の双子の山下教さんの三人で、大石先生にお礼のご挨拶を申し上げに伺いました。お部屋には、福岡県柳川市光善寺前住職の十時舜悟先生ご夫妻がすでにお見えでした。

大石先生はその時いつもの先生に戻っておられて、さっぱりしたさすがしい表情で、にこにこして迎えて下さいました。そして次のようなお話をされました。

ある時藤解先生が言われた。「あんたの本当の名前は南無阿弥陀仏ぞ。大石法夫は仮の名前ぞ。」と。今は本当にそう思えます。南無阿弥陀仏が大石法夫となつて、私を使って活動を始めて下さる。そういう気がします。

私は本当にただの凡人。その凡人が南無阿弥陀仏に帰ったら、阿修羅の琴の、鼓する者なくして音曲自然なるが如し。ピアノを全く弾けない者が自由自在に曲を弾き始める。それが本願力の働きです。

イエスが言うておられます。空を飛ぶ鳥を見よ。かれらは播かず、刈らず、倉に納めず。けれども天の神は彼らを養いたまう。野に咲く百合を見よ。明日はいろりに投げられる野の百合でも、天の神はかれらに美しいよそおいを与えているではないか。であるのに汝らはなぜ食べたり着たりすることに苦勞するのか。今日一日の苦勞は今日一日で足りる。何で明日の苦勞を思わ

ずらうのか。

南無阿弥陀仏に帰ったら、何でもない日常の生活の中で、そういう天地のいのちをわがいのちといただいて、天地の躍動を感じながら生きるようになる。それが愉快なんです。

こうして二泊三日の念仏同朋研修会が終わりました。

今回の便りは特に大石先生の最終講義の場面を中心にして書かせていただきましたが、この外にも教えられたことは沢山あります。中でも、この研修会では、毎回法話の前に四、五人の方々が感話をされました。それぞれの方々が、生活の現場で感じたり、ぶち当たったりしておられる生の問題を率直に出され、その中で念仏の教えを懸命に聞いていこうとしておられます。その姿は本当に尊く、深い感銘を受けました。

十時舜悟先生とときしゆんごが、師弟が深い信頼関係で結ばれて、生活の生の問題を率直に出し合って、共に教えを聞いていくこのような研修会は本当に貴重な場で、大事にしなければならぬと感銘深く話しておられたのが印象に残っています。これは、真宗同朋会運動に当初から深くたずさわってこられて、宗門の歴史や現状に詳しい十時先生とときのお言葉だけに、重みを以って私に響いてきました。

以上、今回の『心光寺からの便り』は、六月二十八日から三十日にかけて開催された第三回念仏同朋研修会の様子を中心にさせていただきました。参加されていない多くの方にとっては、あるいは疎遠な感じを持たれたかもしれませんが、どうかその中に流れているものをお汲み取り下さいますようお願いいたします。

向暑みぎりの砌みぎり、どうぞご自愛の程お念じ申し上げます。

南無阿弥陀仏

文隆拝

平成十四年七月十二日

撰 取 山 心 光 寺